

親密な関係における暴力の分類と促進要因の検討¹⁾

深澤 優子(広島大学大学院生物圏科学研究科)

西田 公昭(静岡県立大学看護学部)

浦 光博(広島大学総合科学部)

本研究は、一般にドメスティック・バイオレンス(以下、パートナー暴力)と呼ばれる親密な異性関係における暴力をとりあげ、その暴力を分類しさらに暴力を促進する要因について検討したものである。157名の女性対象者に、パートナー暴力促進要因、調査対象者の暴力被害経験、加害者と調査対象者の関係、暴力への対処方法をたずねた質問紙調査をおこなった。結果は、パートナー暴力が「冷静・興奮」、「身体的傷害」の二次元で整理可能なこと、また直接的暴力と間接的暴力に分けられることを示唆した。さらに、加害者の自己評価の高さ、加害者の印象の移り変わり、加害者の伝統的性役割観の強さ、加害者のストレスの強さ、加害者の感情的印象、加害者が暴力を許容する程度が大きいこと、加害者の攻撃性の強さ、加害者の両親におけるパートナー暴力関係によってパートナー暴力が促進することが確認された。結果に基づいて、パートナー暴力が暴力なしの状態から直接的暴力へ、暴力なしの状態から間接的暴力へという2種類の進路でエスカレートすることが示唆された。

キーワード: パートナー暴力、親密な関係、加害者

問題

ドメスティック・バイオレンス(以下 DV と略記)とは、「夫婦・恋人間における暴力」(「夫(恋人)からの暴力調査」研究会, 1998)と訳され、社会問題としてとらえられつつある。内閣府(2002)によると、平成14年度4~11月の8ヶ月間で、配偶者暴力相談支援センターにおける、配偶者からの暴力が関係する相談件数は24,020件にも達している。しかし非常にプライベートな問題であることや被害者の自責感から問題が潜在化する可能性が高く、実際の被害状況はより深刻であると考えられる。

1997年に東京都生活文化局によって行われた調査では、「げんこつなどで殴るふりをして脅す」などの身体的暴力を受けている人が33.0%、「何を言っても無視する」などの精神的暴力を受けている人が55.9%、「避妊に協力しない」などの性的暴力を受けている人が20.9%という深刻な事態が明らかになっている(大村, 1999)。さらに「男女間における暴力に関する調査」では、「命の危険を感じるくらいの暴行をうける」という危機的な事態さえ、女性では4.6%の人が“あった”としている(内閣府, 2000)。これらのことから、親密な異性関係における暴力が、かなりの頻度で生じており、深刻な被害を引き起こしていることがわかる。

ところで、DVとはこれまでどのような定義がなされてきたのだろうか。本来Domestic Violenceとは「家庭内暴力」の意であり、児童虐待や夫婦間暴力、老人虐待など、家庭内で起こる暴力の全てが含まれている(Berkowitz, 1993)。しかし日本において一般にDVは、夫婦間・恋人間の暴力と定義されていることが多く、本来の意味より狭義に使用されている。例えば、鈴木・後藤(1999)は、ドメスティッ

ク・バイオレンスを「親密な」関係にある男性から女性への暴力(典型的には夫または恋人からの暴力)であると定義づけている。またDV防止法では第一条に『この法律において「配偶者からの暴力」とは、配偶者(婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む)からの身体に対する不法な攻撃であって生命または身体に危害をおよぼすものをいう。』と述べられている。

そこで本研究においては、DVを日本での一般的な使用にならぬ、親密な関係にある異性間の暴力として定義し、以後「パートナー暴力」と呼ぶ。パートナーとは夫婦に限定しない男女関係において親密な関係を築いている相手とし、また暴力とは、他者に身体的、心理的な危害を加える行動とする。

これまで、パートナー暴力についての研究は、主に臨床領域においてなされてきた(e.g., Dutton, 1995; Walker, 1979)。それらの研究においてパートナー暴力は、身体的暴力、精神的または心理的暴力、性的暴力の三種類に分類されることが多く、研究によっては他にも経済的暴力、言葉の暴力、社会的暴力、物の破壊などにも分類されている(草柳, 1999)。だが、このような分類は相互に独立した関係にない。なぜなら、性的暴力は身体的暴力であるともいえるし、そのネガティブな心理的影響を考えると心理的暴力でもある。言葉の暴力は当然、心理的ダメージも大きい。社会的暴力によって生活の全てを監視され、大切な友人を失ったらそれは心理的暴力であるとも言えるであろう。このようなことを考えあわせていくと、特に心理的暴力は他の暴力にもなって経験される可能性が高いと考えられる。そこで本研究ではパートナー暴力の再分類を行い、パートナー暴力がその被害者にとっていかなる心理構造でとらえられているのかを探索的に検討する。

また、これまでの臨床心理学的研究では、主にパートナー暴力の加害者の特徴が研究されている。そこでは、酒好きまたはアルコール中毒、自己評価が低いこと、経済的貧窮または失業、感情的・自己中心的な性格、暴力許容意識が高いこと、出生家族における暴力経験、加害者の両親におけるパートナー暴力関係、コミュニケーション能力が低いこと、虐待関係に関する社会的な迷信を信じていること、伝統的性役割観が強いこと、病的なほど嫉妬深いこと、二重人格様を呈すること、ストレスの多さなどがあげられている(e.g., Hastings & Hamberger, 1988; Munroe & Stuart, 1994; 鈴木・後藤, 1999; Walker, 1979)。しかしこれらを統合し、モデル化した理論的説明は数少ない。

こうした中で Berkowitz(1993)は、DV を助長させる要因として興味深いモデルを提唱している(Figure 1)。このモデルは夫婦間における、身体的な罰と些細な暴力を促進させる要因を説明している。これによると、7つの要因によって DV は促進されるという。以下にこのモデルにしたがって、詳しく説明する。

このモデルで述べる社会規範とは、家庭内や社会での男性優位のことである。Berkowitz(1993)によると、1975年にアメリカで実施された National Family Violence Survey の結果では、夫が明らかに優勢であるカップルにおいて妻への虐待は約 11%あったのに対し、おおよそ平等であるカップルにおいてそれはわずか 3%であった。また経済的・心理的に妻が夫に依存していると、妻に対する暴力の生起率が高くなることも示されている。内閣府大臣官房政府広報室(2001)によると、「夫は外ではたらし、

妻は家庭を守る」という考えに賛成する人は近年少なくなっているものの、日本では「賛成」「どちらかといえば賛成」合わせて 47.0%にのぼっている。さらに「家庭における全体的な実権を握っているのはどなたですか」という問いに対して、「夫」と答えた者の割合が 55.6%となっている。この考え方に従うと妻は夫に経済的・心理的に依存する可能性が高く、その結果妻に対する暴力が行われる可能性も高くなると考えられるかもしれない。

また、鈴木・後藤(1999)によると、男性が成育過程において親同士の暴力を目撃した経験をもつほど、また親から暴力を受けた経験をもつほど、妻に対して暴力をふるいやすい(Rosenbaum & O'Leary, 1987)ことが明らかにされている。また、Dutton(1999)は、両親の身体的虐待の目撃、恥辱経験、不安定なアタッチメントによって構成されるトラウマから形成される虐待的パーソナリティがパートナー暴力を引き起こしていると述べている。以上のことから、出生家族において暴力を目撃したり、被害を受けたりした経験は、パートナー暴力促進要因となると考えられる。さらに、男性のうち母親からたたかれた経験が多い人はそうでない人に比べて暴力に対する許容度が高く、現実にパートナー暴力の頻度が高くなる(鈴木・後藤, 1999)ことから、暴力にさらされてきた人は攻撃的なパーソナリティを作り出し(Berkowitz, 1993)、暴力に対する規範や価値観を変化させると考えることができる。

さらに、社会的地位もまた、個人的性質に影響を及ぼす。パートナー暴力に関する著書の多くには、加害者男性の職業、収入、教育の程度はさまざまであると記されている(e.g., 鈴木, 2000)。しかしこれらの報告は、家庭内暴力

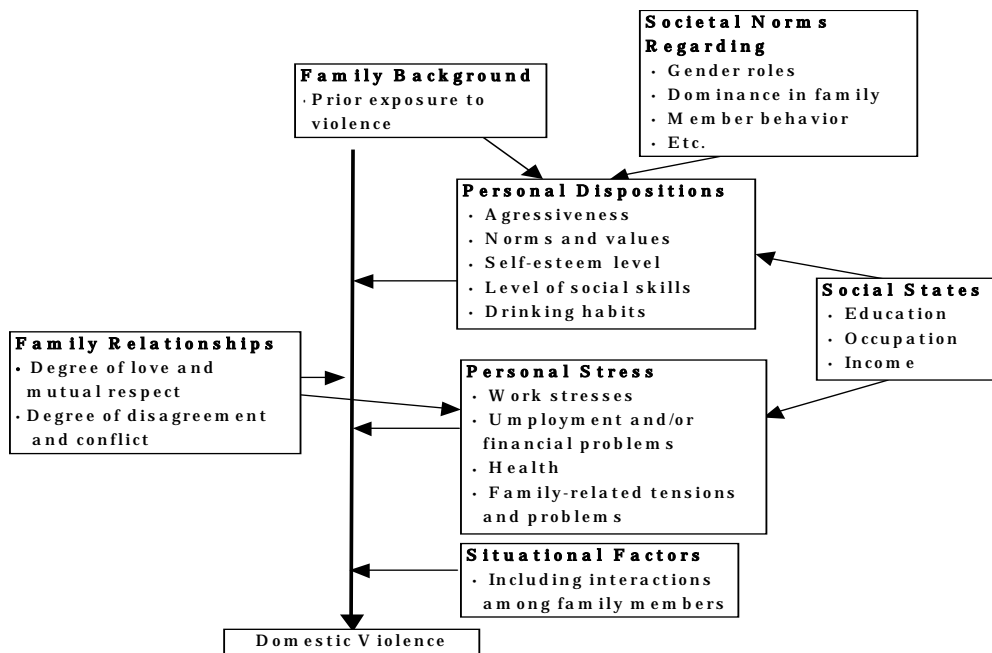


Figure 1 DV 促進要因(Berkowitz, 1993)

が全ての社会経済的なレベルにおいて平等に生起しているということを意味しているわけではない。Araji & Carlson (2001)によると、父親における職業地位と母親における教育レベルが学生の認知による家族暴力に有意に影響していることが示されている。職業地位の差は収入に大きく影響することより、教育や職業、収入などの社会的地位はパートナー暴力促進要因であると考えられる。また、教育のレベルによる価値観の変化、職業による労働ストレス、失業や経済的貧窮によるストレスなど、個人的ストレスに大きく影響を及ぼすだろう。

これまで説明した家族背景、社会的規範、社会的地位に影響を受け、パートナー暴力促進に直接的に影響するのが個人的性質要因である。例えば、幼児期における暴力経験、教育の低さ、アルコール依存、一般的に葛藤が頻繁であること、嫉妬深さ、自尊心などがDVを促進することが明らかになっている(e.g., Hoehing, 2001; Jewkes, Levin, & Penn, 2002)。また、豊田(1999)は、加害者に共通した特徴の1つとして、感情表現の未熟さをあげている。特に加害者は、怒りを溜め込みすぎて耐えきれなくなり、衝動的に暴力をふるうことがある。これはソーシャルスキルの低さと共通するものであると考えることができる。

また、現在の家族関係が良好である場合、パートナー暴力は抑制される。パートナー暴力が生起する関係は、そうでない関係より多くの葛藤を感じていることはいくつかの研究で示されている(e.g., Jewkes *et al.*, 2002)。さらに、家庭内の関係性が良好でない場合、ストレスは大きくなると考えられる。

個人的ストレス要因は、現在の家族関係だけでなく、社会的地位からも影響を受ける。労働に起因したストレスや失業、経済的問題などにより、容易にストレスは高まる。

最後の状況要因は暴力の引き金として考えられている。それは口論であることが多い(Berkowitz, 1993)。日常の不満や悩み、相互の侮辱などが口論となって爆発するとき、辛辣な言葉が取り交わされ、暴力が勃発するのである。

以上のように Berkowitz のモデルは、パートナー暴力促進要因を整理しているだけでなく、その要因間の関係も示しているという点において、パートナー暴力の全体像を理解する上で有益な視点を提供していると言える。しかしその一方でこのモデルは、実証的に検証されたものではなく、また次に指摘する点について不十分であると言える。それは、このモデルがパートナー暴力に典型的に見られる暴力のサイクルを視野に入れていない点である。

DVに関連した理論でもっとも知られているものに、暴力のサイクル理論(Walker, 1979)がある。この理論は、パートナー暴力関係にある者は、緊張蓄積期、暴力暴発期、悔恨期(またはハネムーン期)という3つの周期を繰り返すというものである。緊張蓄積期とは、張りつめた雰囲気

気になり、暴言などの比較的軽い虐待を起こすと言われていいる。この時期に加害者の緊張が徐々に高まる。次の暴力暴発期とは、緊張が最高潮に達し、ちょっとした刺激をきっかけに暴力の暴発が始まる時期である。加害者はこの爆発により、高まった緊張を解く。最後の悔恨期は、加害者が暴力をふるったことに対して謝罪し、優しい言葉をかけたりなどの魅力的な行動をとる。被害者は、この時期の相手に強く惹かれ、関係を解消することができないと言われていいる。このサイクルは広く知られているにも関わらず、これまで実証的検討はなされていない。そこで本研究では、このサイクルが実際に存在するのかどうかを確認するために、加害者の印象の移り変わりを要因の1つとして扱うことにする。

以上より本研究では、Berkowitz のモデルで示されている7つの要因に加えて、加害者の印象の移り変わりという要因のそれぞれがいかに関連し合っパートナー暴力を促進するのかを実証的に明らかにし、さらに分類されたパートナー暴力の内容に、どの要因が影響を及ぼしているのかについて検討する。

方法

静岡および大阪の女子大学生259名を調査対象者とし、留置法による質問紙調査を行った。講義時に、調査目的を説明し、協力を求めた。調査内容が私的な領域に入っていたので、回答を他者に見られる懸念によるデータの歪みを最小限にするため、質問紙に封筒を添付し、密封した上で指定した回収箱に投函するように指示した。調査項目は以下の通りである。

1) 対象者の特定 現在までに親密な関係にあった異性の中で暴力的であった人の有無についてたずね、そのような相手がいる場合にはその中で最も暴力的だった人を選び、いない場合には誰か一人親密な異性を想定するよう求め、以下の測度にはその対象者について答えるよう指示した。

2) パートナー暴力促進要因 Berkowitz (1993) のモデルおよび理論的検討にしたがって、計10項目を作成した。まず社会規範要因として、伝統的性役割観の強さと暴力許容を測定する2項目を作成した。『男女関係について、男尊女卑的な考えを持っていましたか?』『男性は少し暴力的であるほうが魅力的だといった考えを持っている人でしたか?』という項目である。次に個人特性要因として、飲酒習慣、自己評価の低さ、攻撃性、感情的印象を測定する4項目を作成した。『暴力的になるのは決まってお酒を飲んでいるときでしたか?』『自分はどうせ...』『自分はどうしようもない人間だ』というような自己評価の低い人でしたか?』『自分の思い通りにならなかったら、他者を力で従わせようとする人でしたか?』『深く考えること

なく、自分の感情のままに行動する人でしたか』という項目である。さらに、社会的地位要因として、『自由になるお金が少なくて困っている人でしたか』という経済的貧窮を測定する1項目を作成した。また、個人的ストレス要因として『あなたとの関係以外でいつも不安やいらいらを感じているようでしたか』という1項目を作成した。さらに、理論的に考え得る他の項目として『自分はいつか大きなことをする』『自分は本当はすごい人物なのだ』というような、自己評価がとてもし高い人でしたか』という自己評価の高さを測定する1項目、『優しくいたわり深い時があったり、イライラしているときがあったり、また暴力的なときがあったりといったふうに、人格が移り変わるようになりましかなかったか』という加害者の印象の移り変わりを測定する1項目を加え、計10項目を加害者特徴として、『はい』『わからない』『いいえ』の3件法でたずねた。この得点が高いほど、加害者はパートナー暴力促進要因として考えられる各特徴を有していることを示している。

3) 暴力の頻度・内容 1997年に東京都で行われた「女性に対する暴力」調査(大村, 1999)および先行研究の事例内容から検討した、『平手で打つ』『けったり、かんだり、げんこつで殴る』などの身体的暴力10項目、『しつこくなじり続ける』『「役立つ」「人間のクズ」などの言葉でのしる』などの心理的暴力12項目、『避妊に協力しない』『脅しや暴力によって、あなたの意に反して性的な行為を強要する』などの性的暴力5項目の全27項目について暴力の頻度を『全くなかった～日常的にあった』までの5

件法でたずねた。これも、得点が高いほど暴力被害が頻繁であったことを示している。さらにそれらの暴力を経験したことがある身近な人の有無についてたずねた。暴力経験のあった調査対象者には暴力行為の具体的な内容、その行為のきっかけとなった出来事(Figure 1における状況要因)、加害者はどのように考えたり感じたりしていたと思うかについて自由記述を求めた。

4) 加害者・被害者の関係性と暴力への対処方法 恋愛行動の進展に関する模式図(松井, 1993)を参考に関係性の深さを測定する尺度を作成した。この尺度は7段階で構成されている。その後、Figure 1における家族背景要因として、相手の両親におけるパートナー暴力関係と児童虐待経験を測定する2項目を作成した。『相手の両親夫婦の関係は暴力的でしたか』『相手は両親から過剰な身体的攻撃をうけたり、性的虐待、無視、育児放棄などをされていたようですか』という項目である。以上の2項目について『はい』『わからない』『いいえ』の3件法でたずねた。最後に、相手が暴力的になったときの対処方法、親密な異性関係が現在も継続しているかどうかについてたずねた。

結果

質問紙の回収率は71.8%であったが、分析には全て回答してあった152名のデータを使用した。

まず、暴力被害経験について、『未経験』を1、『一回以上の経験』を2とした。その上で対象となった大学生に

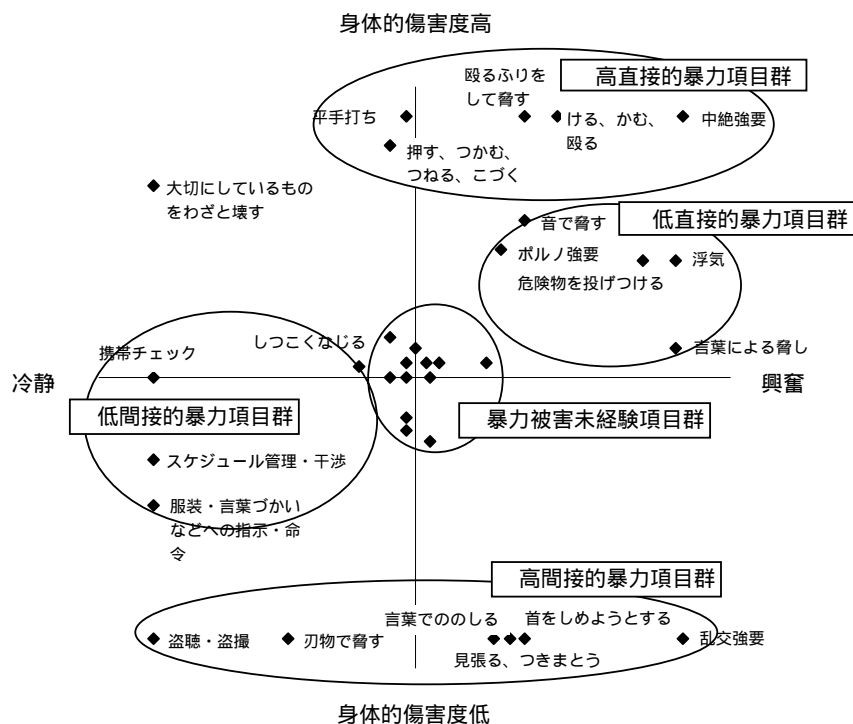


Figure 2 パートナー暴力の分類

おける暴力被害経験率を算出すると、身体的暴力32.9%、心理的暴力38.2%、性的暴力21.1%であった。

次に、被害者認知によるパートナー暴力を分類するために、数量化 類分析をおこなった。結果を Figure 2 に示す。

結果より、右にいくほど『身体を傷つける可能性のあるものを投げつける』『浮気を繰り返す』などの、衝動的で興奮した暴力がプロットされている。また左にいくほど『あなたの携帯電話の着信履歴やメールの内容を勝手にチェックする』『あなたのスケジュールを管理・干渉する』などの、冷静で計画的な暴力が配置されている。以上のことから軸を「冷静 - 興奮」軸と解釈した。さらに、上にいくほど『平手で打つ』『けったり、かんだり、げんこつで殴る』などの、身体に傷害を加える暴力がある。また下にいくほど『役立たず』『人間のクズ』などの言葉でののしる』『刃物で脅す』などの身体への傷害は加えない暴力がある。これらのことから軸を「身体的傷害」軸と解釈した。以上より、パートナー暴力が「冷静 - 興奮」、「身体的傷害」の二次元で整理可能なことが示された。

さらにこれらのカテゴリーをその関係性の強さから5群にわけた。第1群は『平手で打つ』『けったり、かんだり、げんこつで殴る』などの計5項目で構成されており、この群を「高直接的暴力項目群」と命名した。第2群は『物をたたきなどで大きな音をだして脅す』『身体を傷つける可能性のあるものを投げつける』などの計5項目で構成されており、「低直接的暴力項目群」と命名した。第3群は『あなたの携帯電話の着信履歴やメールの内容を勝手にチェックする』『あなたのスケジュールを管理・干渉する』などの計4項目で構成されており、「低間接的暴力項目群」と命名した。第4群は『「役立たず」「人間のクズ」などの言葉でののしる』『刃物で脅す』など計6項目で構成されており、「高間接的暴力項目群」と命名した。最後に、各暴力が未経験であったという項目がプロットされている群を「暴力被害未経験項目群」と命名した。以上より、パートナー暴力は、高直接的暴力、低直接的暴力、高間接的暴力、低間接的暴力の4種類に分類されることが示唆された。

次に、Berkowitz(1993)によって示された、DV促進要

因と分類された暴力との関係を検討した。まず群ごとに暴力被害経験について、「未経験」を1、「一回以上の経験」を2とし、合計得点を算出した。例えば低直接的暴力項目群は5項目で構成されているので、5~10点の間に暴力被害得点が分布することになる。こうして算出された各群における暴力被害得点と加害者特徴との相関係数を求めた。結果を Table 1 に示す。Table 1 から明らかのように、自己評価の高さ、印象の移り変わり、伝統的性役割観の強さ、経済的貧窮、ストレスの多さ、感情的印象、暴力許容規範、攻撃性の高さ、加害者の両親におけるパートナー暴力関係により、パートナー暴力が促進されていることが確認された。

なかでも特徴的だったのは、加害者が暴力を許容する程度は、直接的暴力項目群とは有意な相関関係が認められたが、間接的暴力項目群には相関関係が見出されなかったことである。ここで用いた暴力許容とは、被害者認知による加害者特徴なので、直接的な暴力を行う加害者は暴力を許容しているように見えるが、間接的な暴力を行う加害者は暴力を許容していないように見えるということを示している。さらに、加害者の両親のパートナー暴力関係は低直接的暴力項目群に有意な相関関係が見られたが、それ以外の暴力とは相関関係が認められなかった。

考察

本研究の目的は、パートナー暴力を分類し、さらにパートナー暴力促進要因と分類された暴力との関係を明らかにすることであった。

まず、パートナー暴力は、高直接的暴力、低直接的暴力、高間接的暴力、低間接的暴力の4種類に分類されることが示唆された。さらに暴力許容と高直接的暴力項目群・低直接的暴力項目群との間だけに有意な相関が認められたことから、暴力を許容していないように見える加害者であっても、間接的暴力を行うことが示唆された。加害者が暴力を許容しているように見えるか見えないかという点において、直接的暴力と間接的暴力は質的に異なる、と考えることができる。

さらに、攻撃は好ましいフィードバックが与えられたとき

Table 1 暴力の種類と加害者特徴の相関

	飲酒時 暴力	自己評 価低	自己評 価高	印象の移り 変わり	伝統的性 役割観	経済的 貧窮	感情的 ストレス	感情的 印象	暴力許容	攻撃性	両親のパート ナー暴力関係	児童虐 待経験
高直接的暴力項目群	-.054	.063	.299**	.491**	.334**	.295**	.446**	.229**	.157**	.393**	.126	.027
低直接的暴力項目群	.029	.107	.359**	.590**	.336**	.252**	.513**	.255**	.197**	.473**	.207*	.041
低間接的暴力項目群	-.054	.129	.125	.375**	.179**	.168**	.332**	.207**	-.072	.126	.039	-.001
高間接的暴力項目群	-.027	.024	.300**	.556**	.139	.175**	.425**	.238**	.075	.362**	-.002	.126

* p < .05 ** p < .01

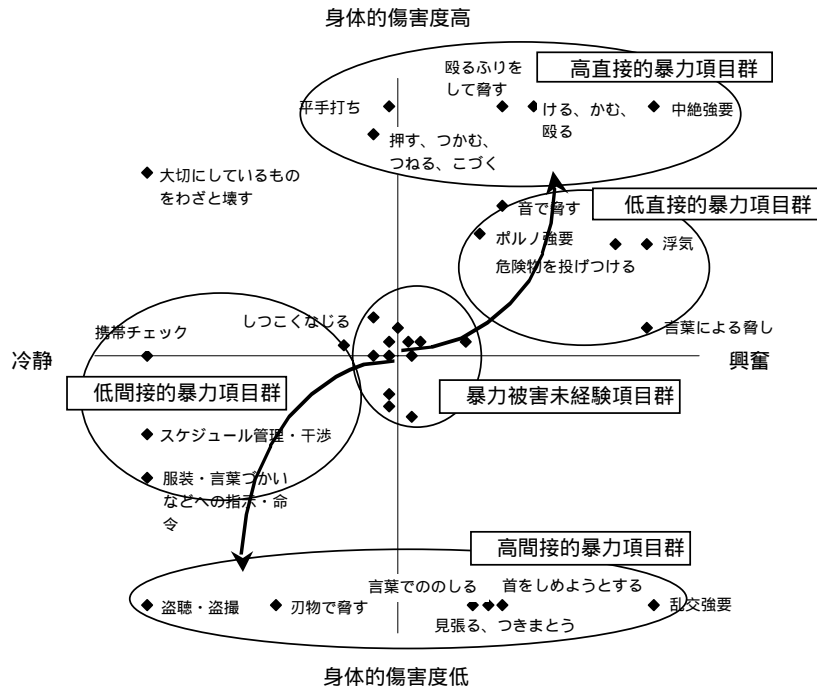


Figure 3 パートナー暴力のエスカレート

にエスカレートする(e.g., 大淵, 1993)という学習理論に基づく知見より、パートナー暴力が行われたとき、被害者が逃げない、もしくは服従するという「報酬」が与えられたとき攻撃はエスカレートすると考えることができる。Walker (1979)は、学習性無力感 (Seligman, Maier, & Geer, 1968) によって、パートナー暴力の被害者が加害者に無抵抗であることを説明している。このような「報酬」を与えられることから、Figure 3 に示すように、暴力被害未経験群から低直接的暴力項目群そして高直接的暴力項目群へ、また、暴力被害未経験群から低間接的暴力項目群そして高間接的暴力項目群へという二種類の暴力の進路があると推測できる。

大淵(1993)は、攻撃に関連する認知処理に2つの経路があると仮定して、攻撃反応過程を1つのモデルにまとめている。このモデルでは、不快感情が強いとき個人の攻撃反応は衝動的な色彩を強くするが、不快感情など情動覚醒をほとんどもっていない場合、高次の認知過程に強く制御されており、決して衝動的には反応しないとされている。本研究で示された、二種類のパートナー暴力において、直接的暴力はより興奮しており、間接的暴力はより冷静であるという特徴がある。このことより、直接的暴力はより情動覚醒が強く、自動的認知処理によって攻撃反応につながると考えられる。逆に間接的暴力は制御的認知処理過程を経るので、戦略的な攻撃になる。各暴力がそれぞれの過程を経ていると仮定すると、その暴力を抑制するために被害者がとるべき適切な行動は、暴力によって異なると考えられる。今後は、パートナー暴力関係形成後に、被害者がどのような行動をとれば、暴力を抑制することがで

きるようになるのかについて、暴力の内容と関連づけた研究が必要である。

さらに、本研究の結果より、Berkowitzのモデルにおける、家族背景要因、社会的規範要因、社会的地位要因、個人的性質要因、ストレス要因がパートナー暴力の促進要因であることが支持された。その中でも被害者から見ると加害者が自己評価の高い人に見えるということが支持されたことから、パートナー暴力の加害者は他者、本研究の場合はパートナーを通して間接的に自己評価を高めようとしていると考えられる。しかし低自尊感情者は、自己高揚動機と自己一貫性動機の葛藤状態にあり、自分に対する高い評価に対して感情的には好ましい反応を見せるものの、認知的には受け入れることができず、最終的に低い評価を自己確認してしまうと特徴づけられている(遠藤, 2001)。このことから、パートナー暴力の加害者はパートナー等の他者に対して虚勢を張り自己評価が高いふりをするのにも関わらず、本質的な自尊感情は低いまま保たれると考えられる。さらに、両親がパートナー暴力関係にあった加害者は低直接的暴力を行うこと、暴力を許容している加害者は直接的暴力を行うことから、両親がパートナー暴力関係にあった加害者は、暴力を許容する考えをもち、直接的な暴力を行うようになることが予測される。これは、パートナー暴力の世代間連鎖を示唆しており、多くの先行研究と一致している。その一方で、本研究の結果では、加害者自身が児童虐待を受けていた経験と現在のパートナー暴力との間には関係がないことが示されている。Dutton(1999)は、Kalmuss(1984)による暴力の目撃と児童虐待被害経験とをわけた分析を引用して、児童虐待の

経験ではなく、両親の暴力を目撃することが後の家庭内暴力のリスク要因となると述べている。本研究の結果も暴力の目撃の効果を支持するものであると考えられる。

また本研究ではパートナー暴力促進要因同士がどのように影響をおよぼしているのかについては言及しておらず、今後はモデルに示されたような因果関係が存在しているのかについて検討する必要がある。加えて、本研究では扱わなかった、家族関係要因、状況要因がパートナー暴力を促進するか否かについて検討することも今後の課題として残される。

以上、本研究ではパートナー暴力の二分類とその促進要因について論じた。なかでもパートナー暴力が直接的暴力と間接的暴力に分類され、それぞれにエスカレートする可能性のあること、また直接的暴力の世代間連鎖が示唆された。今後は、それぞれの暴力の生起過程における認知処理に注目した検討、およびそれに関連した被害者の適切な対処行動、またパートナー暴力の促進要因同士の関係についても詳細に検討する必要があると考えられる。

引用文献

- Araji, S. K. & Carlson, J. 2001, Family violence including crimes of honor in Jordan: Correlates and perceptions of seriousness. *Violence Against Women*, 7, 586-621.
- Berkowitz, L. 1993 *Domestic Violence, Aggression, Its Causes, Consequences, and Control*, (pp.240-271) Temple University Press.
- Dutton D. G. 1995 *The Batterer: a psychological profile*, Harpercollins. (中村正 訳, 2001 なぜ夫は、愛する妻を殴るのか? - バタラーの心理学 - 作品社)
- Dutton D.G. 1999 Limitations of Social Learning Models in Explaining Intimate Aggression, *Violence in Intimate Relationships*, pp.73-89.
- 遠藤由美 2001 自己 山本真理子・外山みどり・池上知子・遠藤由美・北村英哉・宮本聡介(編) 社会的認知ハンドブック 北大路書房
- Hastings, J. E. & Hamberger, L. K. 1988, Personality Characteristics of Spouse Abusers: A Controlled Comparison, *Violence and Victims*, 3, 31-48.
- Hoehing, D. E. 2001, Do jealous spouse abusers exhibit more severe levels of violence than non-jealous spouse abusers: A look at jealousy and other personality and behavioral correlates. *The Sciences and Engineering*, 61, 6137.
- Jewkes R., Levin J., & Penn K. L. 2002, Risk factors for domestic violence: Findings from a South African cross-sectional study, *Social Science and Medicine*, 55, 1603-1617.
- 草柳和之 1999 ドメスティック・バイオレンス: 男性加害者の暴力克服への試み 岩波ブックレット No.494.
- Kalmuss, D.S. 1984, The intergenerational transmission of marital aggression. *Journal of Marriage and the Family*, 46, 11-19.
- 松井豊 1993 恋ごころの科学 サイエンス社
- Munroe, A. H. & Stuart G. L., 1994, Typologies of Male Batters: Three Subtypes and the Differences Among them, *Psychological Bulletin*, 116, 476-497.
- 内閣府 2000 男女共同参画局 「男女間における暴力に関する調査」(概要版) <http://www.gender.go.jp/>.
- 内閣府 2002 男女共同参画局 配偶者暴力相談支援センターにおける配偶者からの暴力が関係する相談件数等について <http://www.gender.go.jp/>
- 内閣府大臣官房政府広報室 2001 男女共同参画に関する世論調査 <http://www8.cao.go.jp/survey/h14/h14-danjo/index.html>
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心 - 攻撃性の社会心理学 - サイエンス社
- 大村裕子 1999 夫やパートナーからの暴力、保健婦雑誌, 55, 432-434.
- 「夫(恋人)からの暴力」調査研究会 1998 ドメスティック・バイオレンス 有斐閣
- Rosenbaum, A. & O'Leary, K. D. 1987, Children: the unintended victims of marital violence, *American Journal of Orthopsychiatry*, 51, 692-699.
- Seligman, M.E, Maier, S.F. & Geer, J. H. 1968, Alleviation of Learned Helplessness in the Dog, *Journal of Abnormal Psychology*, 73, 256-262.
- 鈴木純子 2000 暴力ってどんなこと? 鈴木恵理子(編) ドメスティック・バイオレンス - サバイバーのためのハンドブック - 明石書店
- 鈴木隆文・後藤麻理 1999 ドメスティック・バイオレンスを乗り越えて 日本評論社
- 豊田正義 1999 加害者対策の可能性 岡堂哲雄・関井友子(編) 現代のエスプリ - ファミリー・バイオレンス 至文堂.
- Walker, L. E. 1979, *Battered Women*, Harpercollins. (斉藤学 監訳, 穂積由利子 訳 1998 パタードウーマン - 虐待される妻たち - 金剛出版)

註

- 1) 本研究の一部は、日本社会心理学会第43回大会において報告された。
- 2) 調査項目のうち、暴力被害経験のある身近な人の有無、暴力被害の具体的内容、そのきっかけとなった出来事、加害者の考え、加害者・被害者の関係性、暴力の対処方法、親密な異性関係の結末については、本研究では扱っていない。

Classification of domestic violence and examination of risk factors

Yuko FUKAZAWA (*Graduate School of Biosphere Science, Hiroshima University*)

Kimiaki NISHIDA (*Faculty of Nursing, University of Shizuoka*)

Mitsuhiro URA (*Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University*)

This study dealt with the violence in intimate relationships generally referred to as domestic violence, herein deemed partner violence. In this study, the authors classified the type of violence and examined risk factors that can promote partner violence. One hundred and fifty seven women completed a questionnaire covering risk factors that can promote partner violence, the experience of participants suffering partner violence, the relationship between assailant and participant, and methods of coping with the violence. The results showed that partner violence can be arranged two-dimensionally with respect to "calm-excitement" and "bodily injury". Partner violence could also be divided into direct violence and indirect violence. Furthermore, the results showed the following risk factors promoting partner violence: assailant high self esteem, change in impression of assailant, adherence to traditional gender roles by the assailant, high stress levels for the assailant, emotional impression of the assailant, allowance by the assailant for violence against women, aggressiveness of assailant, and the establishment of a pattern of violent relationships by the parents of the assailant. Based on these results, escalation of partner violence from no violence to direct violence, and from no violence to indirect violence is discussed.

Keywords: partner violence, intimate relationships, assailant